

詩時評

第38回

アナーキーな  
個人の意思がある

松本衆司

「芸術は生の否定へのすべての意志に対する無比に卓越した対抗力にはかならない。すぐれて反キリスト教的、反仏教的、反ニヒリズム的なものにほかならない」(「力への意志」より)とは、ニーチェの言葉である。

誰もが人生を創造するアナーキーな個人の意思というものを持つ。個人を主体とし、その感情に根差す(詩)の拠って立つ原点でもある。今年八月十日、新川和江さんが亡くなられた。新聞やテレビはその死を追悼するとともに彼女の業績を報じた。代表作とされる「わたしを束ねないで」が報道番組で朗読された。創作時の新川さんの「わたしを束ねないで」と叫ぶ心もまさにそこにある。

三上真知個人誌『天飛』No.7を読む。「二

ーチエを手に取り」を引く。彼女は詩人であるとともに難民支援活動家である。

国はどこ? / 問いかけると / OK / 座ったままパイプ椅子をガタガタガツと引き / 立ち上がった / そして、背を向けてしまった / 一息をし / シャツを勢いよく捲り上げた / Do you know this? / 背中一面 / 両翼を広げた / 入墨 / フアラヴァハル / 父はクルド / 母はトルコ / Have no homeland / 2014年に父親はクルドの音楽を聴いたことを通報されて逮捕。その後、激しい拷問を受けて獄死した。この年、トルコではクルド労働党(PKK)に対する政権の締めつけが強化され、クルド人の摘発が頻繁に行われていた。また、2008年に兄は、シリアとの国境付近で「掃討作戦」の戦闘員として死亡した。 / TVや新聞で見聞きしていた / モノクロ世界を / フアラヴァハルが / 一気にカラーに変容させた / 彼自身もFacebookにエルドアン政権批判の書き込みをし、以来身の危険を感じることが多くなり、被害妄想が絶えず彼を襲った母を独り残し、トルコを出た。 / 父はクルド / 母はトルコ / 私はゾロアスター

\*ゾロアスターあるいはツアラトゥス  
トラ。古代ペルシアで、ザラスシュ

トラがアフラ・マズダーを信仰対象として創設した宗教。拝火教。

生まれ育った土地で、祖先を敬い子々孫々の幸いを願いながら安寧に暮らすことを、或いは、自らの可能性を信じて望む場所で生きることが、妨げるものは何か。宗教か、国家か、法か、怨念か、欲望か、血か、人間の性か、それとも憎しみの連鎖か……。誇り高きゾロアスターの「フアラヴァハル」を背に纏った若者の生きる場所は「どこ?」にある。善なる神「アフラ・マズダー」の知恵が今こそほしいと、彼と彼の地を想い、願う。

颯木あやこ詩集『アウラの棘』(思潮社)を読む。「0時61分」を引く。

まだ 詩を一篇も書いていない頃 / わたしたちは / 詩人として出逢った / あなたの言葉をわたしも持ち / 馴染んだトランプカードのように / 何度も並べ替えた / わたしの言葉は / あなたの目が / 朝方になると見る山の / 霧のなかに紛れていて / ふたりで拾いあつめた / 時々 / ゼリーの塔が空に聳え / わたしたちは登ろうと / 登ろうとして支えあつたが / いちばん美しい星しか / わたしたちに瞬かないので / あとがきの裏のくすんだ写真を求めて / アパートの

廊下を這った／仔猫はいつも わたしたちの未来にいて／そっぽを向いており／日向は かさかさした手で／招いてくる／そして詩人は／招かれるまま／まるでつた今のように／悲惨な光の花束をかがやかせている未来へ／墜ちていくのだ

詩は寄る辺ない若い詩人たちの心の描写であろうか、それとも、ロマンとアンニユイの中で寄り添う恋人たちの虚ろな現実であろうか。孤独者として、自らの実存の印象に縋って愛と真実を掴もうとする、息苦しいが純粹な「アウラ（靈気）」を実感する詩だ。

和田まさ子詩集『途中の話』（思潮社）を読む。「湯船」を引く。

風呂場の窓から／キンモクセイの匂いが入ってきた／石鹸はいらぬ／あなたのきれいな指がパラパラと銀河を叩く音／いつになど湯滴は水滴に温度を変えるのか／湯船に浸かり／眠りかけた／蕾がとろりとひらくような、そのとき／なにかおかしなことをいう漫才を聞いたようで／笑った／自分のその声におどろく／気がつく／顔もほどけて／どんな話でわたしは笑ったのだろうか／全身をゆるめてほどく／好きなひとに会ったように／宙吊りのまま、目に

見える重さが滴る／死はそうやって／やさしいユーモアの掛け合いを聞かせながら／思いもかけずくるのだろうか／いまだに分別がなく／都会に迷いこんだ最近の鹿が／なぜそこにいるかわからないで／ひとを見つめている／期待を持たないし／セカイの仕組みを理解できなくて／捨ててきたものにつまずくことがある／でも、いくつもの混乱した部屋を通つた／酸っぱく発酵した夏に／サヨナラをして／こんどはどこへ行くか／きょうは／うれしい、を選ぶ

詩集には、町の風景や暮らしのひととき、そして忘れられない思い出が綴られている。そのそれぞれの詩に魔法にかけられたように引き込まれていくのは何故だろう。それこそが、詩人の「分別」のない感受性から生み出される不思議のなせる業、ということか。

熊谷ユリヤ詩集『地球上に遍在するガザ・ウクライナ』（コールサック社）を読む。「地球上の至る所に在る」を引く。

地球上の至る所に／かつて在った、／地球上の至る所に／この瞬間も在る、／そして、これからも在り続ける／ウクライナやガザ、／知らされていなかった／では済ま

されない。／／習っていなかった／では許されない。／／弾圧や迫害を恐れて／沈黙を余儀なくされる／人たちも、／侵略者ののだろうか？／侵略者の子孫たちは／独裁者たちの罪を、／詫びつづけるべきだろうか？／侵略者の国や地域に住む／友たち／侵略された国に住む／友たち／その人たちの／家族たちの／無事を祈るだけでは／自己満足に過ぎない／のだろうか？／／平和を祈るだけなら／偽善者／に過ぎない／のだろうか？

通信輸送サービスの急速な充実と発展によりグローバル化した世界の人々は、地球市民として、地球全体と全人類の健全な営みを模索し始めた。その一方、新聞・TVやSNS上には侵略・犠牲・国境紛争・ミサイル・核兵器等々の禍々しい言葉があふれている。翻訳者として国際的な位置に立つ熊谷ユリヤは共存を諦めない人々の勇氣と祈りを自身の詩に込める。

荻野ゆう子詩集『いきている』（編集工房ノア）を読む。「マウンド」を引く。

自らピンチを招き／告げられたピッチャー交代／無言でマウンドを降りる／目だけで溜め息をついて／／すべてを知る仲間のも

とへ視線を逸らすもの／宙を見るもの／互いに黙ったまま／交わさなくとも／分かれることはある／／ベンチから／自分のいな  
い野球を見つめる／／曝して生きるのだ／もう一度／マウンドに立つからには

詩人は少年の心の痛さを見つめる。それは様々な感情が錯綜する痛みだ。その弱さや惨めさから新たな勇気を生み出し再び挑む少年を想い、荻野ゆう子は「曝して生きるのだ／もう一度／マウンドに立つからには」と結ぶ。教諭の長い経験から紡がれた大切な言葉だ。

朝倉裕子詩集『雷がなっている』（編集工房ノア）を読む。「ナンキンハゼ」を引く。

正月明けの昼下がり テレビで雪景色の松江城とナンキンハゼの白い実が朗らかに跳ねているのをみた 江戸時代にはナンキンハゼの実が蝋燭の原料になったという／／息子たちが帰省したときに雑煮を食べながら保育園の話題になった 六年間春休みも夏休みもなく毎日通ったというのに何も憶えていないらしい 絵の具にまみれて遊んだこと お昼寝で眠れなくてぐずったこと せみ採りにお泊り保育や夏祭り 食前の祈りも生誕劇も／／保育園の庭にも三本のナンキンハゼがあった 夏には木陰をつくっ

て子らを休ませ 秋にはすっかり葉を落として真っ白な実を枝の先々にちりばめて晴れた空を飾っていた／／三十年以上が過ぎて 園での日々は忘れていても息子たちの胸のどこかにはナンキンハゼの点す小さな灯りがあるだろう 子らの喚声は空に弾けて今も園庭のナンキンハゼの実をゆらしているに違いない

詩人の眼があればこそ、何気ない日常にある植物の移ろいや空気の揺らぎなどの小さな出来事に心を寄せる。人はみな抒情詩人と言えないか。書くか書かないかは問題ではない。逆に書くことで奇を衒い、詩人の心を失うこともあろう。朝倉裕子の詩はまさにその無垢な詩人の眼が見出した「詩」である。

工藤恵美子詩集『柿色の家』（編集工房ノア）を読む。「おみくじ」を引く。

島の沖を流れる黒潮に乗って／運ばれた種子が繁茂／ピロウ樹の大群落／亜熱帯のジヤングル／青島神社／ここ宮崎で結婚のスタートを切った／／あの時／青島神社の御神籤を引いたら／「大凶」／不安で涙がこぼれた／帰り道の／二つの鳥居をくぐったあと／夫は 引き返して／御神籤を引き直して来た／／どれくらい待っただろうか／

「大吉」のおみくじを／私の掌に載せてくれた／／あの日から／御神籤は／引いてない／／六十年ぶりの青島／目に飛び込んできたのは／境内の木の枝々に結ばれた／御神籤の／あふれる／白

浮き世には十人十色の人生があるが、皆その人生に良きことを念じ、八百万の神に願懸けて、それぞれに大切な家庭を作り、守り、育んでいく。結ばれたお神籤は人々の素朴な願いの花の如くである。「柿色の家」はそのようなかけがえない夫婦の、そして家族の尊い歴史を刻んだ豊かな実りの詩集である。

今岡貴江詩集『サイレントブルー』（土曜美術社出版販売）を読む。「会いたくなったら」を引く。

ここからはわたしのテリトリーなので入らないでください／わたしもこのボーダー以上は出たりしません／もしかしらあつてしまつたら／あなたとわたしの境界がなくなつてしまいます／わたしはあなたのつもり／あなたはあなたのつもり／あなたがつまらなくなってしまったので／喧嘩になってしまいました／／そもそもわたしはあなたではないので／理解ができないであなたになつてしまふのです／あなたのつもりであなたの心

配をして／すっかり解決したつもりの顔を  
していたら／むかつくでしょう／そんなあ  
なたにわたしもむかつきます／だからわた  
しのテリトリーに入らないでください／わ  
たしこのボーダー以上は出たりしません  
／もしも私からLINEがきたらスルー  
してください／ブロックしておいてくれ  
てもかまいません／そうでないとわたしは夢  
中になってあなたのところまで行くでしょ  
う／でも絶対にテリトリーから出ないでく  
ださい／わたしもちよつと泣くらぬのの時  
間をもらえれば／敷居を跨いだりせず帰り  
ますから／それで満足ですから／もしわ  
たしに会いたくなったら／すぐに会いにき  
てください／待っています

ふと、漱石の『草枕』の冒頭を思い浮かべ  
た。あの明治の時代もこの現代も、自己と他  
者、理性と感情、それぞれの人の心の出し入  
れの困難は同じなのだ。私たちはそれほど日  
常の暮らしの中で「あなた」と「わたし」の  
「ボーダー」の上で右往左往している。いず  
れの作品も、関係性の中での痛みと、そのギ  
リギリの心があるのまに描かれている。

増田耕三詩集『庭の蜻蛉』（竹林館）を読む。  
「カンナ」を引く。

——カンナカンナきみを忘れぬおのこあり  
／この俳句のようなものを発表したのは  
確か海のそばのホテルで開かれた／同人誌  
の集会でだった／それは私がまだ／帰り  
つけるはずの夏があると／信じていたころ  
のこと／犬の散歩でよく通る野道に／赤  
いカンナの花が咲いていた／忘れ果てるこ  
とを／許さないとでも言わんばかりに鮮烈  
に／カンナ／それは通りすがりの道端に  
咲いていた／花にすぎなかったはずだが／  
そんな句をひねり出してから／私は妙にカ  
ンナのが気になりだした／カンナは  
いまでもどこかで／私を待っているのではな  
いかと／カンナよ／あのとき私は／き  
みが待っているかもしれない／小道のあり  
かを気にしつつも／不甲斐なく犬にひきず  
られて／その小道から遠ざかったのだった

あとがきに二十四年ぶりの詩集とあった。  
竹林館現代日本詩人選100叢書の四冊目の  
詩集である。詩の冒頭「カンナカンナきみを  
忘れぬおのこあり」は印象深い。「それは通  
りすがりの道端に咲いていた／花にすぎなか  
った」と、カンナに寄せる思いは、なるほど  
この詩集全篇を貫く。それは浪漫を捨てきれ  
ない「男」の心の正直な感懐である。

鷹森由香詩集『金の星』（ふらんす堂）を

読む。「海の底のみずうみ」を引く。

紅海の底に／塩水溜りと呼ばれる海底湖が  
あるという／塩分濃度による比重の大きさ  
から／周りの海水とは決して混じりあわな  
い／境界には寄せる岸辺があり／境水面は  
波立っている／海の底にもうひとつのみず  
うみが存在するように／古来より／その  
法帖さえ／海は母に喩えられた／生命の起  
源は海に求められ／美の女神も海の泡から  
誕生した／／ヒトのからだもまた海に由来  
する／その証拠に／赤い血も羊水も塩を含  
み／泣くとなみだや鼻水はしょっぱい／滔  
滔たる潮は／生態系や文明をはくくみ／透  
明だったり深い藍色だったり煌めきながら  
時を流れる／／人は皆／内奥の海に／懐か  
しい岸辺を持ち／うたかたの生のひととき  
／それは母であり／恋人である／月のうつ  
くしい夜／私のみずうみは／しずかにさざ  
めいている

人の営みは四苦八苦しながらの生老病死だ  
としても、そこに自らの心を砕いて、いかに  
慈しみ、いかに赦し、いかに求めあうかであ  
ろう。この詩はその心のありかを示す。とり  
わけ最終連で、「人は皆」と、思い出を留め  
る大切な場所として心の風景が描かれる。こ  
の詩集の真髓がここにある。